

# 平成30年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成30年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ニシン

学名 *Clupea pallasii*

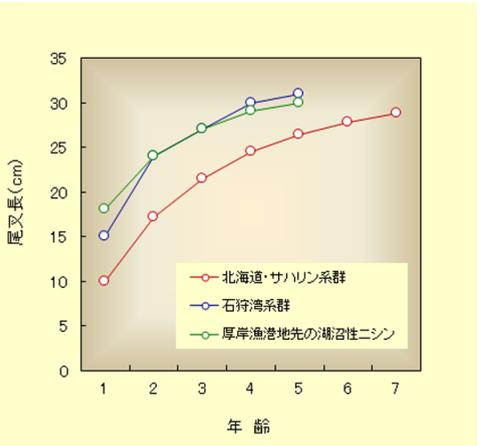
系群名 北海道

担当水研 北海道区水産研究所



## 生物学的特性

寿命： 6～7歳（地域性ニシン）、10～18歳（北海道・サハリン系群）  
 成熟開始年齢： 2歳（100%）（地域性ニシン）、4歳（50%）（北海道・サハリン系群）  
 産卵期・産卵場： 1～5月（地域性ニシン）、3～5月（北海道・サハリン系群）、5～6月（テルペニア系群）、地域性ニシンは北海道沿岸域や汽水湖沼域で産卵、北海道・サハリン系群はサハリン南西沿岸で産卵  
 食性： カイアシ類、端脚類、オキアミ類、魚類（卵・仔稚魚を含む）  
 捕食者： 大型魚類、頭足類、海産哺乳類

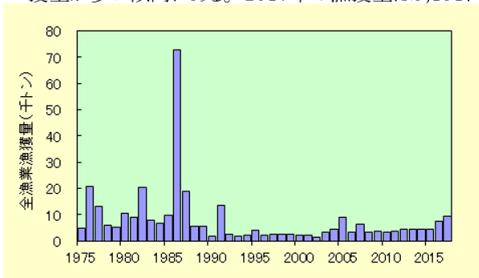


## 漁業の特徴

漁獲は沿岸漁業と沖合底びき網漁業(沖底)による。沿岸漁業では、日本海側の石狩湾系群と各地の汽水域やその周辺海域に生息する湖沼性ニシンによって構成される地域性ニシンを主な対象として、刺網や小型定置網により漁獲される。沖底では、日本海及びオホーツク海における水深100～200mの海域で漁獲量が多く、太平洋における漁獲量は少ない。水域により漁法や漁期、産卵群、索餌群もしくは越冬群などの漁獲対象は異なる。

## 漁獲の動向

19世紀末～20世紀初頭には北海道・サハリン系群が大規模な資源を形成し、漁獲量は年間40万トン以上であった。しかし、同系群は20世紀中頃に減衰し、1975年以降は豊度が高まった場合に我が国沿岸へ来遊し、漁獲量を増加させることはあるものの、年間漁獲量は1万トンを下回ることが多い。直近5年間(2013～2017年)ではそれ以前よりも漁獲量が多い傾向にある。2017年の漁獲量は9,191トンであった。

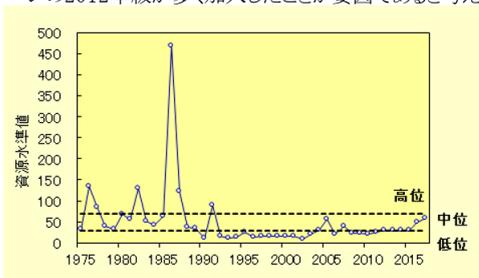


## 資源評価法

近年では、北海道・サハリン系群によると考えられる漁獲量の増加は頻繁には起こらず、本資源は石狩湾系群および沿岸各地の湖沼性ニシンによって主に支えられている。このため、北海道・サハリン系群が減衰した後である1975年以降の漁獲量に基づいて資源評価を行った。

## 資源状態

資源水準は、1975～2017年の漁獲量を平均した値を50として各年の漁獲量を指標値(資源水準値)化し、70以上を高位、30以上70未満を中位、30未満を低位とした。2017年の資源水準は、資源水準値が59.2となったため中位と判断した。動向は、直近5年間(2013～2017年)における漁獲量の推移から増加と判断した。2016年から2017年にかけての資源状態の好転は、オホーツク海における沖底の漁獲量が大きく増加したこと、日本海側において親魚量が維持されたこと、太平洋側において厚岸漁港地先に分布する湖沼性ニシンの2012年級が多く加入したことが要因であると考えられる。



## 管理方策

各地の地域性ニシンを漁獲対象とする沿岸漁業の管理が重要である。親魚量が著しく減少すると卓越年級群が発生しにくくなることから、多くの地域で小型個体の保護が行われている。このような取り組みの中、漁獲量は増加傾向にあるが、海洋環境の変化等が資源状態に影響を及ぼす可能性は否定できないため、小型個体を保護する取り組みの継続は不可欠である。沖底においても小型個体を保護する制限が設けられている。種苗放流は地域性ニシンの分布域において広範囲で行われるようになってきたが、稚魚期までの生残が加入量変動に大きな影響を及ぼすと考えられるため、産卵場となる沿岸域や汽水湖沼域の環境保全と並行して進める必要がある。

#### 資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は増加
- 資源状態の好転は、オホーツク海における沖底の漁獲量が大きく増加したことが一因と考えられる
- 日本海側において親魚量が維持されたこと、太平洋側において厚岸漁港地先に分布する湖沼性ニシンの2012年級が多く加入したことも、資源状態が好転した一因と考えられる

#### 管理方策のまとめ

- 各地の地域性ニシンを漁獲対象とする沿岸漁業の管理が重要である
- 漁獲量は増加傾向にあるが、小型個体を保護する取り組みを継続することが不可欠である
- 種苗放流は、産卵場となる沿岸域や汽水湖沼域の環境保全と並行して進める必要がある

執筆者: 横田高士・千村昌之・山下紀生

資源評価は毎年更新されます。